

村上専精『仏教統一論 第二編 原理論』 に見る中国仏教観

水谷 香奈*

はじめに

日本仏教において近代とは、1000年以上におよぶ歴史の中で培われてきた様々なあり方を、大きく転換せざるを得ないような変革が相次いだ時代であった。近代という時代区分は一般に明治から始まるとされるが、まさにその初年である明治元（1868）年に発せられた神仏判然令によって、長らく続けられてきた神仏習合は政治的意図の元に強制的に分離され、神道は最終的に国家によって「非宗教」と認定されるに至る。一方、諸外国からの圧力によって明治6（1873）年にキリスト教禁教令が廃止される中、仏教はキリスト教と同じ「宗教」の一つとして位置づけられた。近代における宗教概念は、伝統的な儀礼よりも合理的な教理を、集団での活動よりも個人的な信仰を重んじるプロテスタント的な側面を強く持っている¹。そのような宗教概念によって規定された近代仏教の特色について、末木文美士はイギリスの仏教学者デイヴィッドL.マクマハンの『近代世界における仏教』（2012）を引いて、仏教の近代化（マクマハン「仏教の近代主義」と言いかえている）とは「仏教のある要素を選択し、主要な西洋の近代性（modernity）の言説や実践と結びつけた混濁的（hybrid）な宗教・文化の形態」であると述べている²。

本論で取り上げる村上専精（1851-1929年）について言えば、彼にとって「仏教のある要素」とは各宗派の思想であり、「主要な西洋の近代性」とは仏教に対する西洋的な学術研究の反映（原典主義、合理的解釈）であっ

*東洋大学東洋学研究所客員研究員

ただろう。特に後者の代表が村上の名を世に知らしめた「大乘非仏説論」であり、村上は1901年に『仏教統一論 第一編 大綱論』（以下『大綱論』）においてこれを主張したことで、一時大谷派の僧籍を離れることになった。そのような経緯もあってか、村上についての研究は従来少なかったが、2000年代に末木をはじめとする数名の研究者が論文や著書などで村上の業績に言及し、今年になってオリオン・クラウタウを中心とした研究者が『村上専精と日本近代仏教』（法藏館、2021年）を上梓したことで、一気に研究が進められた感がある。したがって村上の思想やその背景、影響等に関する研究は、今後も更なる展開が期待される。

ところで村上の「仏教統一論」は、構想段階で大綱論・原理論・仏陀論・教系論・実行論の5部からなるという壮大なものであった。思想面をまとめた最初の3部に限っても、村上独自の論理のうちに多くの主張がなされており、総合的な理解と考察は容易ではない。村上の名を有名にした「大乘非仏説論」さえ、袁輪顕量³らが指摘しているように、専精本来の意図は「大乘經典とその思想は歴史的に見れば釈尊に遡らないが、真理の面から言えば連続性がある」ことを指摘するものであり、結論としては大乘仏教を擁護するものである。村上自身、『仏教統一論 第二編 原理論』（以下『原理論』）の「再版の辞」において、「多数の批評家を見るに、著者の意を斟酌する人は甚だ稀れにして、ただ一編の文を読み、之を以て全部完結のものとして、批評する人最も多きやに覚ゆ、これ余の最も憾みとする所なり」⁴として、主張の全体像をとらえた上での批評を望んでいた。村上は『大綱論』に対する批判の一部には『原理論』で答え、『原理論』に対する批判の一部には「教系論」で答えたいとも述べており⁵、その主張の全貌を知るには5部すべてを読了して理解することが必要と思われる。筆者は残念ながらそこまでの知見を持ち合わせていないが、本稿では従来あまり検討されていない『原理論』を中心にしてその主張を概観した上で、主に中国仏教に関連した記述に注目しつつ、村上の意図や問題点を考察してみたいと考えている。

1. 村上專精の生涯

「仏教統一論」の主張を検討する前に、まずは村上の生涯を見ておきたい。村上が若い頃から体験してきた内容が、彼の思想の上にも少なからず影響している部分があるためである。

村上は嘉永4（1851）年、丹波国氷上郡船城村宇野山（現兵庫県氷上郡春日町野山）にある、真宗大谷派の小寺、教覚寺の住職である広崎宗鑑の息子として生まれた。村上姓は、後に養子に入った寺で受けたものである。生家は貧しく、10歳にならないうちからいくつかの寺院に預けられ、その中で儒教典籍や真宗聖典の素読などを習ったという。慶応3（1867）年、村上は播磨行きを志し、つてを頼って姫路にある善教寺の義導⁶の私塾に入門し、漢学を学んだ。

慶應4（明治元）年、明治維新とともにキリスト教（耶蘇教）が入ってくると考えた村上は、これに対抗するために義導による旧約聖書創世記の講演を聴くなど、キリスト教の教えを学び、明治4（1872）年には故郷でも反耶蘇の講演を行おうと、彼自身も各地をまわりながら遊説した。しかし、故郷では小寺院の生まれであることを理由に白眼視され、この恥をそぐために大学者になることを決意したという。村上はわずかな資金をもとに越後（新潟）にある無為信寺の行忠から唯識や教行信証などの講義を受け、やがて京都に出て大谷派唯一の専門学校だった高倉学寮（現大谷大学）に入った。ところが学寮内の紛争に巻き込まれて、入学後数ヶ月で退寮に追い込まれ、いくつかの寺院を転々としたのちに、三河国（愛知県）入覚寺村上界雄の養子となった。

村上は住職となり結婚もしたが、学問への情熱止みがたく、その後も因明学を熱心に学ぶなど寺務をおろそかにしがちで、やがて親戚や檀家などから批判を受けるようになった。そこで、3年間遊学させてくれたら必ず学師の位を得て帰ると誓い、刻苦勉励の末、4年後に見事「大谷派五等学師」の称号を得た。曹洞宗の妙巖寺（豊川稲荷）で因明大疏、成唯識論、

唯識二十述記などを講義していたところ、明治20（1887）年、東京の曹洞宗大学（現駒澤大学）から依頼され、都内で講義を行うことになった。この時には、家族も檀家もこれまでの村上の実績を認め、喜んで送り出してくれたという。

東京に出た村上は井上円了（1858-1919年）などとも出会い、円了の『仏教活論序説』や哲学館（現東洋大学）の創立に刺激を受けた。午前中は曹洞宗大学で教員として講義を行う一方、午後は哲学館で学生として哲学などの講義を受け、その中で仏教に対する研究方法を改めることを考えるようになる。明治23（1890）年に村上が出した『日本仏教一貫論』はすぐに再版されるなど反響が大きく、同年には東本願寺から大谷教校（浅草）の校長に任じられ（まもなく教校が廃止されたので、東京に置かれた第二中学寮の寮長となった）、東京帝国大学の印度哲学の講師も務めている。明治30（1897）年に青年僧らによる東本願寺改革運動を支持したかどで学師その他の地位を失ったが、学者としての評判は高く、翌年には大谷派から新門主の侍講を命じられ、そのときに講義した仏教概論が後の『大綱論』の草案となっている。村上は同時期に仏教史研究の必要性を感じて研究雑誌『仏教史林』を発刊しており、やがて廃刊するもその成果を踏まえて『日本仏教史綱』などを刊行する。この仏教史研究メンバーの中には、東洋大学や駒澤大学で教鞭を執った鷲尾順敬（1868-1941年）や境野黄洋（1871-1933年）がいた。

『大綱論』が世に出たのは明治34（1901）年だが、大乘非仏説論が宗内で議論を呼び、最終的には新法主大谷光演（1875-1943年）から自主引退を勧められ、村上はそれを受けて僧籍を除く処分を本山に依頼した。本山の意向もあって明治44（1911）年には復籍したが、その前に村上は「仏教統一論」を第三編まで刊行している。その後は東京帝国大学の教授や大谷大学の学長を歴任し、昭和2（1927）年に『仏教統一論 実践論』上下巻（第五編に相当）を刊行。2年後の昭和4（1929）年に世を去った⁷。

これらの事績の中で、「仏教統一論」に影響しているのは以下の点であ

ろう。

- ・キリスト教への意識
- ・井上円了から受けた刺激
- ・仏教史研究への関心

これらについてはすでに先行研究がなされているが⁸、この後においても適宜言及したい。

2. 『原理論』の概要

(1) 教理史研究の方針

『原理論』の内容は多岐にわたるため、ここでは村上特有の論理や主張に関わるものを選んで紹介したい。まず、村上は『原理論』序論で、仏教教理に対する歴史的研究の必要性について述べている。中国において孔子と老子の思想が表裏一体となって展開したように、また西洋においてギリシャ哲学とキリスト教が同様に関係し合いながら展開していったように、仏教の中にも相互に関わり合いながら発達した思想の流れがあるとするのである。それを解明するのが教理史研究だが、村上はその方針について、次のように二つに分けて述べている。

其一は時に世界発現の事実と相合せざる者あるも、敢て之に関せず、只幾多の教理を比較し来りて、思想開展の系統的順序如何を討究するにあり、余は仮に之を思想史と云わんとす。其二は思想開展の系統的順序如何に注目せず、専ら世に発現せし事実の前後を闡明にし、之に依て発達の大勢如何を討究するにあり、余は之を事実史と云わんとす。二者の中純乎たる歴史は、前者にあらずして後者にあること弁を俟たざるなり。然るに教理史研究に三部を分つ中に於て、第三の教系論に限り事実史に依て然るべきも、第一の原理論及び第二の仏陀論は、思想史に依らざるを得ざるものあり。故に教理史研究を部別すると共に、歴史的研究を二分せざるを得ざるもの

とす。⁹

これは、仏教の教理について第二編「原理論」、第三編「仏陀論」、第四編「教系論」に分けて研究する中で、歴史の変遷の通りに論じるのは「教系論」のみであり、「原理論」と「仏陀論」は歴史的な前後関係よりも、関連し合う思想の系統を優先して追及するかたちで論じるということである。それは国によって宗派の有無が異なっており、思想の展開の過程を国ごとに考察しようとする、仏教全体を統一的に貫く思想の系譜を論じることができなくなってしまうことによる。したがって、村上は「今や仏教全体を貫徹する思想開展の大歴史は、各国に発現せし各種の教理を比較研究の結果、これを論理の判断に任じ、以て思想開展史を編むの外別に方法あるべからず」¹⁰として、インド・中国・日本の各仏教に登場する様々な教理を比較して、なおかつそれらの教理が「進化」という前提の元に、論理的な考察を心がけてその次第を定めていくとする。

しかし、村上の言う「事実史」は僧侶の活動年代や文献の成立年代といった客観的事実によってその展開を考察することが可能だが、「思想史」は「進化」という観点から思想同士の優劣を判断するものであり、いかに論理的な考察を心がけると言っても、そこに論者の主観的見解が大きく影響するであろうことは想像に難くない。村上は近代的な仏教研究者として、当時としては学問的・合理的な姿勢の元に「仏教統一論」を執筆するべく努力しているが、往々にしてこのような主観的判断に基づく主張が折り込まれていることには注意すべきである。

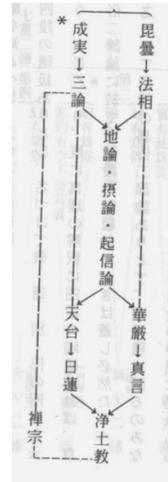
(2) 縁起的教系と実体的教系

『原理論』は教理の中でも、特に釈尊の悟り得た真理とは何かを論じるものであり、涅槃や真如などと呼ばれるものを検討していくことになる。

順序として、最初にバラモン教の梵我一如、続けて釈尊の涅槃観が論じられる。ただし、前者は仏教の涅槃観の淵源ではあるが我を認める点で仏

教とは異なっており、後者はあまりに広大無辺なため不可説であって、それを述べるのがその後の仏教（特に大乘仏教）であったとする。したがって仏教思想として検討可能な涅槃観は釈尊滅後に展開されるものであり、それには現象世界（有：事）を説明することに力点を置く縁起的教系と、現象世界の背後にある実体（空、真如などの真実なる本体：理）を説明することに力点を置く実体的教系に分かれる。仏教では大きな思想的流れとして、この二つの教系が表裏一体となって展開する、というのが村上の主張である。

前者の縁起的教系に属するのは、説一切有部の真理観（我空法有）、法相宗の真理観（真如凝然）、華嚴宗の真理観（事事無礙法界）、そして真言宗の真理観（阿字本不生観）である。後者の実体的教系に属するのは、『成実論』の真理観（真俗二諦）、三論宗の真理観（八不中道）、天台宗の真理観（三諦円融）、そして日蓮宗の真理観（南無妙法蓮華經）である。法相と華嚴、三論と天台の間には、地論・摂論・『大乘起信論』といった如来蔵思想の真理観（真如随縁）が入っており、これらは両方の教系に関わっている。この二つの教系は、浄土を指方立相の立場でとらえると現象面に着目することになるので縁起的教系に、唯心・観念（観想念仏）の立場でとらえると実体的教系に連なること、および社会への普及度という活動的・実践的側面から見て、最終的に浄土教（南無阿弥陀仏）において統合されている。また、三論宗の空の思想を受けつつ「教外別伝」を掲げて独自に発展した活動的・実践的仏教として、禅宗が存在している（右図は『新編仏教統一論』、p. 283）。真理を極める向上門の極致が禅宗、真理を他者に説明する向下門の極致が浄土教である。



以上の中で、毘曇と成実（小乗）、法相と三論（権大乘）を対峙させ、それらよりも華嚴や天台を高く評価する解釈は、円了の『仏教活論序説』

にも見られる¹¹。また、円了は浄土教、禅宗、日蓮宗といった、いわゆる鎌倉期の新仏教について「〇〇哲学序説」と名づけた書籍を1890年代に相次いで刊行しており、それらの実践的側面に着目しつつ、『禅宗真宗二宗哲学大意』（1901年）では天台や華嚴などで語られた理論との関係を考察している¹²。

円了は弁証法を仏教の空・仮・中に当てはめた上で、天台の「中」の思想が仏教全体を貫いていると見て、天台の教理を最も高く評価しており、浄土教を仏教の教理的発達の最終段階と位置づけた村上の『原理論』とは一線を画する部分もある。これは、円了が仏教の理論的側面（哲学）に重きを置いており、浄土教に相当する浄土宗と浄土真宗を仏教の感情的側面（宗教）に相当すると見ているのに対して、村上は宗教と哲学の異同について「宗教は必ず一方に不可説の意味を存す」¹³として、仏教の宗教的側面（不可説の实在への確信）はどの宗派にも共通していると見ているためである。したがって、両者の見解は完全に一致しているわけではないが、出会ってから10年以上経った時点での著作においても、互いの枠組みにある程度の共通性が見られるのは興味深い。

3. 中国仏教に対する認識

（1）如来蔵思想の重視

円了の仏教観と村上のそれとを比較したとき、まず目につくのは地論宗・摂論宗・起信論が仏教全体の思想体系の中に組み込まれていることである。これらに共通するのは如来蔵思想であり、確かにそれが日本も含めた仏教全体に与えている影響は極めて大きい。村上が「この二宗派はその教勢甚だ盛大ならず」¹⁴と述べているように、宗派としては後代まで持続しなかった。しかし、「教理展開の系統上にありて、重要欠くべからざるものなるが故に」¹⁵、『原理論』の第9章においてその経緯¹⁶や法相宗も含めた唯識系三宗の相違点が詳しく述べられているのである。

三宗の相違点は、「第一に心の分類法」「第二に阿梨耶識の解釈」「第三に真如の見解」であり¹⁷、より具体的に言えば地論宗は八識説で第八阿梨耶識が真如に相当、摂論宗は九識説で第八識の阿梨耶識は真妄和合、第九識の菴摩羅識（阿摩羅識）が真如に相当、法相宗は八識説で第八阿梨耶識は完全な妄識という具合だが、『原理論』には各説の根拠として天台の『法華玄義』『法華文句』、三論の『大乘玄論』『中観論疏』、そして『成唯識論』『摂大乘論』『大乘起信論』などが挙げられており¹⁸、村上がこれらの説をまとめ上げるために多くの文献に目を通したことが知られる。元来村上は『成唯識論』を講義するなど唯識思想には造詣が深かったことから、法相宗からの批判の対象となった摂論宗、そして『三国仏法伝通縁起』で「華嚴宗に属す。別宗にあらざるが故に」¹⁹として、唐代に華嚴宗に吸収されたとする地論宗についても、その思想的特徴を明らかにしたのではないかと推測される。そして、東アジア世界において大きな影響力を持っていた『起信論』と合わせて、そこに共通して説かれている真如縁起説を、有部の業感縁起説や法相の頼耶縁起説よりもさらに進化した縁起説として扱ったと推測される。上記の唯識系三宗に関する記述は、彼の後輩でもあった境野黄洋の「支那の仏教」（『仏教大観』丙午出版社、1918年）などに受け継がれており、現在でも多くの仏教解説書で目にする事ができる。村上の研究成果が今日にまで影響を及ぼしている一例であろう。

なお、『原理論』には『起信論』の撰述に関する疑問はまったく見られない。近代日本仏教において『起信論』の中国撰述説は望月信亨の提起（1918年）を待つ必要があり²⁰、『原理論』の時点では村上は『起信論』が馬鳴の真撰であると疑っていなかったようである。また、村上は地論・摂論・法相の三宗の相違について、先述した三点以外にも多くの異説があるとしながらも、「然るにその原書を尋ぬれば皆同人の作なり、即ち『成唯識論』と『十地経論』とは共に世親論師の作なり」²¹、「縦令印度に於て異説の紛起するなしとするも、翻訳者の見解必ずしも相一致すと謂うべからず」²²として、三宗の典拠はすべて世親の著作に関係している以上、これらの相

違はインド仏教に起源があるのではなく、菩提流支、真諦、玄奘といった翻訳者たちの見解によるという、やや不正確な解釈も見せている²³。

(2) 密教に対する見解

次に、村上が密教の伝来に関して中国と日本の意義を述べている箇所を引用する。

彼国にありては、未だ密教の爲めに特に一宗派を成立するの運に至らざりき、この密教が特に一宗派を別立するに至りしは、真に本邦の弘法大師空海に原由す。(略)是を以て密教は遠くその端的を印度に胚胎せりと雖、その思想は支那に於て発達し、又日本に來たりて發展せしもの最も多々なりと云わざるべからず。即ち哲学的思索を以て密教を解釈することは、多く支那・日本に來たりて開展せしならん。支那にありては一行禪師が天台門教の論旨を以て密教を説き、日本に來たりては、弘法大師が華嚴門教の説意を以て密教を明かし、終に本来通俗的なりし密教に、至玄至奥なる哲理を包含せしめ、優に華天兩家の上に位するものに至らしめたりと謂わざるべからず。²⁴

これによると村上は、密教はインド仏教由来ではあるものの「本来通俗的」であり、そこに哲学的な思想が込められるようになったのは、中国では一行(683-727年)、日本では空海(774-835年)の力に依るところが大きいと考えている。ただし、一行は確かに天台に上がったことがあるなど天台宗とも関わりがあるが、『大日経』の本地身である大日如来について、『大日経疏』で「此経本地身即是法華最深秘処」²⁵と語られているというのは、実は正確な記述ではない。このように主張したのは日本の台密であって²⁶、『大日経疏』の原文にはこれと同様の一文は存在しないのである。

さらに村上は「密教の起源は遙に印度にありと雖、その発達には日本に來たりて頓にその頂点に達せり」²⁷として、台密と東密が密教教理の発達の

ピークであるとしている。密教に関して言えば、村上から見ると中国は日本の前段階としての位置づけが強いと見て良いであろう。

(3) 禅宗（仏心宗）の分析

村上が禅宗をほかの宗派から分けて考えているのは、「歴史上の順序に依るにらず、又教理上の優劣を以て次第するにらず、唯教家と教外との別を以て、その順序を立するにあり」²⁸と述べているように、禅宗が「教外別伝」というスローガンを掲げているからである。禅宗がその由来として、釈尊から摩訶迦葉へと無言で伝えられた「正法眼蔵涅槃妙心」²⁹があると主張していることについて、村上は仏教各派は根の同じ大樹から出た枝のようなもので、はじめからほかの宗派と流れが違うものがあるはずはない、と述べ、最も密接なのは羅什のもたらした三論仏教であろうと推測している³⁰。三論宗の八不中道は理論、禅宗の坐禅弁道は実践であり、そこで追究されている真理には違いはない。

この推測では、禅宗の重要なスローガンの一つである「見性成仏」に関わるものとしての仏性（如来蔵）の存在は念頭に置かれていない。初期禅宗の成立事情の解明については、20世紀初頭に発見された敦煌文献の存在が大きく、村上が『原理論』を執筆している1903年時点では、まだ地論宗との関係などは論じることができなかつたためである。

また、禅宗が中国仏教においていかに重要な位置を占めているかという点についても言及されていない。これは宋代以降の中国仏教史に関する情報が不足していたためではないかと思われる。境野黄洋の「支那の仏教」でも達摩以降の祖師の系図や南宗禅の隆盛、臨済宗と曹洞宗の関係などは言及されているが、禅宗はあくまで多数ある中国仏教の宗派の一つに過ぎないという扱いである。ちなみに、常盤大定の『支那の仏教』になると、以心伝心など祖師禅の極致とするところは「いづれも印度禅と異なる特色とみてよい」³¹とされ、中国の禅宗がインド仏教とは異なる特色と展開を見せていることを認めている。

おわりに

本稿では、村上专精の生涯について概観し、続けて『原理論』の特徴について、その研究方針や思想系統の分類という観点からまとめてみた。『原理論』は歴史学や文献学などに基づいた成果を反映させた、学問的・合理的な記述も見られるが、同時に各宗派の思想の「進化発展」について村上の見解に基づいた序列化がなされており、その両者が明確に区分けされずに混在しているという特色を持つ。さらに、「思想史」という言葉を用いつつ、そこには歴史的経緯よりも思想同士の関連性を優先して考慮するという村上独自の立場が見られる。そのような点に気づかぬまま、研究者が書いた学術的な書物であると思って読み進めると、大いに混乱させられるであろう。『原理論』発刊と同時に寄せられた多くの批判の中に、村上の歴史眼と比較眼にまだまだ宗派的偏向が含まれていると見て取ったものがあるという先行研究の指摘³²には納得させられる。

村上はさらに大きな視点から、仏教とキリスト教という異なる宗教同士であったとしても、両者に類似の概念（神と仏、天国と浄土、汎神論的解釈など）が見られる場合もあれば、根本的に異なる部分もあり（人格的神と非人格的理想）、それらは互いに循環する関係にあるとも見ている³³。これは宗教学的に見てもある程度妥当な指摘であり興味深いのが、一方で本稿の後半で見たように、個別の宗派の思想に対する解釈では、時代的な制約による誤りや、仏教東漸の到着地である日本の仏教を高く評価しようとする傾向も見られる。村上の思想的オリジナリティについては、円了をはじめ同時代の仏教者の著作との更なる比較検討が必要であろう。このように様々な問題を含んではいるが、多数の宗派が併存する中で「仏教の本質とは何か」という問いに答えるという作業は、現代においても決して無意味なものではないのであり、近代という大きなうねりの中で仏教思想の統一という大作業に苦闘した村上の足跡から、我々が学ぶものもまだ多いのではないかと思われる。

【注】

- 1 末木文美士ほか編『新アジア仏教史14日本Ⅳ：近代国家と仏教』、佼成出版社、2011年、pp. 62-70.
- 2 末木文美士『日本仏教入門』KADOKAWA、2014年、p. 258.
- 3 蓑輪顕量「第四章 〈大乘非仏説論争〉再考—村上专精の意図—」（オリオン・クラウタウ編『村上专精と日本近代仏教』、法蔵館、2021年、pp. 109-131.
- 4 村上专精原著・太田善磨新校監修『新編仏教統一論：大綱論、原理論、仏陀論』、群書、1997年（原書は第一編大綱論が1901年、第二編原理論が1903年、第三編仏陀論が1905年に刊行）、p. 186.
- 5 村上前掲書、p. 187.
- 6 岸本義導（1876-？：号は天外）。元は結城姓で、仏教学者の結城令聞（1902-1992年）は甥にあたる。善教寺は本願寺派だが、義導は転派して大谷派に移り、後に大谷派嗣講を務めた。
- 7 村上上の生涯については、村上前掲書の巻末にある略歴を参照した。
- 8 キリスト教や仏教史と村上との関係については、クラウタウ前掲書所収の論文であるミシェル・モール「序章 統一論とユニテリアン思想」、三浦周「第一章 拝耶への姿勢—〈実学〉と村上专精の思想形成—」、池田智文「第八章 村上专精とその弟子—『明治維新神仏分離史料』の編纂について—」などを参照。円了との関係については、田村晃祐「井上円了と村上专精—統一的仏教理解への努力—」『印度学仏教学研究』49（2）、2001年、pp. 507-517を参照。
- 9 村上前掲書、p. 196.
- 10 村上前掲書、p. 197.
- 11 井上円了「仏教活論序説」、東洋大学創立100周年記念論文集編纂委員会編『井上円了選集』（3）、1987年、pp. 327-393. 佐藤厚による現代語訳（大東出版社、2012年、p. 85）では六宗の関係が図で整理されており、わかりやすい。
- 12 田村前掲論文、pp. 514-515.
- 13 村上前掲書、p. 391.
- 14 村上前掲書、p. 266.
- 15 同上
- 16 鎌倉期の華嚴宗の学僧凝然（1240-1321年）の『三国仏法伝通縁起』には地論宗と撰論宗の名前があり、『原理論』にある地論宗の来歴は『三国仏法伝通縁起』の記述と大同小異である。一方、撰論宗の来歴は『三国仏法伝通

縁起』とは一部一致していない。たとえば、真諦が撰大乘論を翻訳した後
に『義疏』八巻を作ったことが紹介されているが、これは『三国仏法伝通
縁起』にはなく、あるいは『撰大乘論』真諦訳の序などに「本論三巻。釈
論十二巻。義疏八巻。合二十三巻」(大正31、113a)とある箇所などを参考
にした可能性がある。

- 17 村上前掲書、p. 267.
- 18 村上前掲書、pp. 267-270.
- 19 凝然述、赤松皆恩校訂、藤島了隠再閲『校正三国仏法伝通縁起』、沢田友吾
郎ほか出版、1877年、上巻14右。
- 20 大竹晋『大乘起信論成立問題の研究:『大乘起信論』は漢文仏教文献からのパッ
チワーク』国書刊行会、2017年。
- 21 村上前掲書、p. 275.
- 22 村上前掲書、p. 276.
- 23 これは常盤大定の『支那の仏教』(東京帝大仏教青年会、1935年、p. 39以降)
では訂正されており、撰論宗の主張した阿摩羅識も「たしかに印度に於て
相当に行はれたものである」(p. 45)と考察されている。
- 24 村上前掲書、p. 317.
- 25 村上前掲書、p. 318.
- 26 たとえば宥範の『大日經疏妙印鈔』には「即如云妙法蓮華最深祕處者即此
經本地身也云云」(大正58、89b)とある。
- 27 村上前掲書、p. 319.
- 28 村上前掲書、p. 376.
- 29 村上前掲書、p. 377.
- 30 村上前掲書、p. 378.
- 31 常盤前掲書、p. 117.
- 32 クラウタウ前掲書、p. 100.
- 33 村上前掲書、pp. 402-403.

【参考文献】

- 井上円了著、佐藤厚訳『仏教活論序説』、大東出版社、2012年
大竹晋『大乘起信論成立問題の研究:『大乘起信論』は漢文仏教文献からのパッ
チワーク』国書刊行会、2017年
オリオン・クラウタウ編『村上専精と日本近代仏教』、法藏館、2021年

- 凝然述、赤松皆恩校訂、藤島了隠再閲『校正三国仏法伝通縁起』、沢田友吾郎ほか出版、1877年
- 境野黄洋編集会編・菅沼晃監修『中国仏教Ⅲ（「支那仏教史講話」）』（境野黄洋選集第三巻）、うしお書店、2005年
- 末木文美士ほか編『新アジア仏教史14日本Ⅳ：近代国家と仏教』、佼成出版社、2011年
- 末木文美士『日本仏教入門』、KADOKAWA、2014年
- 田村晃祐「井上円了と村上専精—統一的仏教理解への努力—」『印度学仏教学研究』49（2）、2001年
- 東洋大学創立100周年記念論文集編纂委員会編『井上円了選集』（3）、1987年
- 常盤大定『支那の仏教』、東京帝大仏教青年会、1935年
- 萩原雲来ほか『印度の仏教 日本 of 仏教 支那の仏教 欧米の仏教』、丙午出版社、1914年
- 村上専精『禅宗史綱』、富山房、1941年
- 村上専精原著・太田善磨新校監修『新編仏教統一論：大綱論、原理論、仏陀論』、群書、1997年